

Vol.3

**THE
YOUNG
MEN**

A decorative graphic on the left side of the page, featuring stylized red and pink floral elements, including leaves and swirling vines, partially overlapping the vertical text.

はじめに

水城ゆう

すこし間があきましたが、テキスト表現ゼミの機関誌『HYOMeKi』ひよめき 第三号をお届けします。もちろんこの間もテキスト表現ゼミは開催されてきました。参加者がそれぞれ切磋琢磨をつづけ、着実な成果を重ねています。すでに商業ベースの作品に軽く達しているもの、あるいはそんなせこい基準を超えて驚くほど理解しがたい、しかし確実におもしろい作品など、次々と生まれつつあります。確実にこの場合は、次世代の書き手の虎の穴の様相を呈しはじめていると、私は実感しています。

そもそも私自身は小説書きとピアノ演奏という「表現の二股」ふたまたぎをかけていた男であります。かつてはふたつの別々の表現を行ったり来たりしていると思っていたんですが、あるときふと気づいたのです。このふたつの表現は、実は、根底では共通する原理にもとづいておこなわれているのではないかと。別々に分けて考えようとするから、よいクオリティにならないのではないかと。

そこで、まずは自分自身のためにも、いろいろなジャンルの表現に通底する基本原理を探りはじめたのです。

それが現代朗読協会でおこなわれているテキスト表現ゼミの基本理念となりました。

現代朗読協会では、朗読と音楽の表現原理の融合がおこなわれました。そしていま、朗読と音楽とテキスト表現の原理の融合がおこなわれようとしています。いつてみれば、アインシュタインが光の速度とエネルギーと質量の相関関係を相対性理論で導き出したときとおなじスリリングな体験です。

ちよつといいすぎですが。

ともあれ、おもしろいことが起こっていることは間違いありません。

この電子マガジンは、ここで起こっていることのほんの一部「うわずみ」にすぎませんが、その一端でもかいま見ることはできるかと思えます。どうぞ楽しんでください。

目次

はじめに

2

唐ひづる 銀の斧

前野佐知子 偏頭痛

船渡川広匡 続・風の谷のナントカ

船渡川広匡 薬師

奥田浩二 龍の飛ぶ日

野々宮卯妙 銀のフラスケス

倉橋彩子 キャプテンキッドの財宝

照井数男 缶コーヒー

照井数男 思い出の穴

山田みぞれ バラトール

山田みぞれ 缶コーヒー

特集 佐藤ほく

★

銀の斧

唐ひづる

初登場、唐ひづるの作品です。

テーマは「銀の斧」。特にそのような指定はなかったんですが、唐ひづるは例の有名なイソップ童話の物語を本歌としてこれを書いてきました。

童話は現代小説風にディテールを書きこむだけでもおもしろいパロディになることがあります。唐ひづるはそこるところを充分にわかつた上で、さらにこつてりとしたサービスを盛りこんでいます。そこが彼女の味です。まったく遠慮のないこつてりサービスでんこ盛りの作品を、今後も期待します。

(水城)

「ここだ」

背負っていた仕事道具を肩からおろして立ちどまると、五郎太は日に焼けた汗まみれの顔をよれた手ぬぐいで拭った。

一度だけ親父と一緒に来たことのある、この池のほとりの木々は、日光がよく射すためか育ちがよく、まつすぐ空に向かつて伸びていた。湿った朽ち葉の上に落ちた枯れ枝をバキバキと折り、図太く張り出した曲がり根っこを漕いで、ようやくとこの柔らかい下草の生えたポツカリと明るい場所に出たのだが、親父は、ここには絶対一人で来るなど言っていた。

ごつごつと温かい木の幹をぼんぼんと叩いて斧を入れる位置を定めると、五郎太は父親から譲り受けた古い黒

ずんだ斧を振り上げた。砥石で丹念に研ぎをかけ、舐めるように丁寧に磨きあげられた刃先が日の光を受けてきらりと光った。

昨夜、斧の手入れをする五郎太の動きを、五歳になる息子の六助が興味津々といったように目を輝かせて追っていた。六助は賢くて素直な子だが、痩せっぽちで飯をあまり食わない。でも、旨い餅なら、きつと喜んで沢山食うに違いないのだ。この正月にはどうしても六助に餅を食わせてやりたいその一心で、五郎太は他人が休んでいる間も働いて少しでも多く稼ごうとした。

すると誰かが取り上げたかのように斧が手から外れ、ぼしやりと波をたてて澄んだ青緑色の池に飛び込み、幾重にも円い波紋を広げながら沈んでしまった。

「ああ、なんてこった。なんでこんなことになったんだ。畜生！俺の斧！」

五郎太は緑の池に向かって叫び、頭を抱えて蹲った。

澄んだ空を溶かしたような美しい池から、浅葱の着物

を着た顔の真つ白な女が、光に長い黒髪をなでられるようにすうーつと浮かんできて、鈴虫の声で憐れむように五郎太に話しかけた。

「斧を落としたのか。お前の斧は、金の斧か。銀の斧か。」
五郎太ははっとした。こんな言い伝えを親父から聞いたような気もするが、どう答えればよかったのだったか。思い出せない。どうしよう。金か、銀か。すずめのお宿なら覚えている。小さい方を選ぶと財宝が入っていた筈だ。

「銀の……」

答え終わらぬうち、脳天と目玉に熱く焼けるような衝撃が襲った。どこから降って来たのか、五郎太の頭には、自分が磨き上げたあの古い斧が楔のように打ち込まれていた。ゆっくり傾いてゆく視界の中で、白い女が薄い唇をつり上げてニイッと笑うのが霞んで見えた。

★

偏頭痛

前野佐知子

前野佐知子も初登場です。

とりたてて変わった作品というわけではないし、描かれている状況もよくある話と違っていいほどです。描が、描写しているディテールと語り口がまぎれもなく作者の姿を照らしだして、読者の前に立たせます。

うまいストーリー展開や軽妙な会話、テクニカルな処理やなめらかな文体があふれるいまにあつて、まずは作者の体臭が感じられるような語り口からスタートする姿勢が大事だと考えています。

その点、前野佐知子も今後が楽しみな作者といえましょう。

(水城)

目の前にいる男が吐き気がするほど厭だ、とミホは思った。

ダイアナのベージュの五センチヒールをはいたミホとほぼ同じくらいの身長。一六五センチはないだろう。目をあわせたくなくて、仕方なしに視線を向けた先にある額は、揚げ物を何度も揚げたときの油のような茶色で、それがどろつともてらつともつかない不気味な光をたたえている。そこに二本、長くて深い横じわが刻まれている。

今もらった名刺をその溝に血が出るほど深く差し込んで、キャッシュカードを読み取るように横一文字に引いてやりたい。そしたら、その溝に溜まっている脂も垢も

少しはとれてきれいになるだろう。

その様子を想像したミホは、無意識に口の端を動かしたようだ。

自分の話を受けたと勘違いした男は、さらに勢いこんで話し出す。

ミホはこめかみに軽く手をあて、額から更に視線を上に移した。薄く油をひいたような頭皮が見える。決して多いとはいえない細い髪の毛にポマードが塗りたくられ、固定されている。コイツ、絶対〇年以内にはげれる。ミホは預言者の目でその頭皮を眺めながら、「ええ」「そうなんですか」となんとか相槌をはさみこんでいく。

周りから華やかで穏やかな会話の断片が入ってくる。BGMに流れる弾むようなピアノの音色も、ナチュラルな色調で上品にまとめられたホテルのホールも、パーティーという雰囲気には本当にふさわしい。それなのに自分だけ工事現場にいるみたいだ。ドドドドドとドリルのように神経を打ちつけてくるうるさくて間がまったくない男のしゃべりがミホの忍耐をどんどん打ち砕いてい

く。

こんなゴキブリドリル男と話すために、一万円も払って婚活パーティーにきたのか？ 七万円も出してピンクのシフォンワンピースを買ったのか？ 三十二歳の事務職女子には、こんなの通勤着にもなりはしない。一体なんの罰ゲームだ。早くパートナーチェンジのベルが鳴ってくれと祈るような気持ちでウーロン茶が入ったグラスを握りなおす。

「おや？ どうしました？ 顔色が悪いですよ」

テメエのせいだよ、と本音を言うわけにもいかず、ミホはなんとか笑顔に見えるように表情筋をせいっぴい動かしてみた。

「ちよつと偏頭痛が」

「そりゃいけない、テラスにでましょう！ 僕がつきそってやります」

はつきりと青ざめたのが、自分でもわかった。

「いえ、大丈夫です」

「いやいやいやいや、大丈夫じゃないね、その顔は。さ、さ、僕の腕を貸してあげるから。遠慮なんかしないで。」

これも縁だからね。さあ、さあ！」

ゴキブリが手を伸ばす。

こめかみの辺りがきりきりする。

触るな！ 私に触るな！

その時、グラスを叩き割る音とともに、「ちん」とパー
トナーチェンジを告げるベルの音が控えめに鳴った。

★

おなじみ船渡川広匡の作品をふたつ続けて。

無意識領域との交信に成功した船渡川広匡は次々とわけのわからない作品を世に送りだしつつあります。いまやまだだれも彼のことを知りませんが、いずれ近いうちに世界征服を成し遂げることでしょう。

彼の作品を楽しむコツは「バカになること」です。バカは最強です。大脳皮質に仕事をさせてはいけません。意味や論理ではなく、ただあるがままのむき出しのストーリーに身を任せて楽しむのです。

(水城)

続・風の谷のナントカ

船渡川広匡

夜空の雲が、星が、月が、青黒い中に輝きながらずずぐるぐるとらせんを描いて渦巻いている。その夜空の下の土の一本道がうねっている。

画家の頭の中でダダダダという電子音が鳴っている。心臓がどきどきする。あせる。いてもたってもいられない。

おぼつかない足で下っていくと、によりりと高い一本杉が海草のようにゆらゆらと生えている。全長数メートルもある巨大な蟬が一匹、落ちないようにしっかりと張り付いている。その根元の陰に、長柄の斧を地面に突き立てて、青いワンピースを着た少女が立っている。

「お乗り」

少女はそう言うとお脇にあったスーパーカブにまたが

り、ジェットヘルとゴーグルをかぶってエンジンをふかせた。

画家は何だか分からないまま後部座席に座った。乗らなければならぬような気がした。その時少女から斧を手渡されたので何とか片手で抱えながら座席をもう一方の手で握った。

スーパークاپは道をそのまま進んでいくと、森の奥へと入っていく。空に赤い火柱のようなものが見える。何かが燃えているのが画家には分かった。

やがて開けた場所へ出た。巨大な飛行機の残骸のようなものが燃えている。

よく見ると、手前に一人の少女が倒れている。スーパークاپを止めて二人で走って近寄ると、彼女は虫の息で話しかけて来た。

「積み荷を燃やして」

「積み荷なら大丈夫。全部燃えたわ」

「よかった」

少女は息を引き取った。

しかし画家が振り向いてよく見ると、全部燃えてはい

なかった。残骸の中心に、土色の巨大な丸い塊がある。それは火にも耐えて燃え残っている。

画家の頭の中でダダダダという音が更に大きくなった。画家にはこれが何なのかさっぱり分からなかった。まるで巨大な胎児が膝をかかえて丸まっているように見えた。しかしはつきり分かるのは、これは邪悪な世界に属するものであり、このままにしてはおけないという事だった。

画家は長柄の斧を両手に持って、飛んでくる火の粉をかぶりながら土色の塊に走りよった。そして野球の投手のように体をしならせて大きく振りかぶった。斧の刃先が炎の照り返しで銀色に輝く。

思い切り振りおろすと、土色の塊にどすと刃がつき、たつた。そこからびきびきとひびが一直線に入っていく、ばかりと割れた。

ごうわあああという轟音と共に、塊の中から夜空へ一直線に何かが吹き出していく。この世のあらゆる悪意が吹き出しているようであった。そしてそれはどす黒いらせんを描いて夜空のうねりに吸い込まれていった。

くすし
薬師

船渡川広匡

アジャンタが小屋の入り口から中をのぞくと、一人のぼろを着た老人がむしろの上でごりごりと石臼をひく背中が見えた。

「どんな病気も治せる薬師がいると伺って参りました。私は悟りを求めて苦行すればするほど、頭痛や吐き気がひどくなってしまうのです」

アジャンタは老人から白い粉薬の入った袋を受け取った。「これでようやく悟れる」と喜んで毎日その薬を飲んで苦行を続けていると、高熱やだるさで苦行どころではなくなってしまうた。

アジャンタは病んだ体をおして老人のいる山小屋に行き、症状を訴えた。

「そりやそうだろう。それは毒だからな」

聞くなりアジャンタは老人を思いきりぶんなぐった。倒れた所に馬乗りになって、無理矢理口の中に薬を大量に突っ込んで近くの水瓶に溜めてあつた水をごぶごぶ飲ませた。

老人は息絶えた。アジャンタは小屋のすぐ脇の土を掘って老人を葬ると、山を降りた。

アジャンタはもはや苦行をしなかつた。人里へ向かい、雇われて毎日汗を流して畑を耕し、草を刈った。体を動かしている間はずかの間心が暗れるものの、夜寝る度に夢の中で自分の殺した老人が何度も出て来て、朝起きると頭痛や吐き気がした。

ある日アジャンタはあの老人の山小屋へふらふらと向かつた。小屋は老人がいらない他はそっくりそのまま、薬を作る石臼や材料が残っていた。

アジャンタは自分の病気を治す為に薬を調査しては自ら試し、様々な薬を作った。風邪薬や水虫を治す薬などは出来るものの、頭痛や吐き気を治せる薬は作れなかつた。やがてアジャンタのうわさを聞いた人々があつた。い薬を求めてやってきた。アジャンタは無償で薬を与え

るのだが、人々はありがたがつて食料などを捧げていった。

アジャンタは石臼をひいて薬を作り続けた。やがて何十年も石臼をごりごりと回すうちに、心安らかになっている自分を見つけた。頭痛や吐き気も無くなっていた。

ある日、一人の若い僧が訪ねて来た。

「どんな病気も治せる薬師がいらつしやると伺いました。私は悟りを求めて苦行を積んでいるのですが、頭痛や吐き気でそれどころではなくなってしまうのです」

アジャンタは白い粉薬の入った袋を手渡した。

「これをあぶつて匂いをかいでみる」

僧は言われるままに試してみた。すると、世界がうねりだし、自らの身が空を飛ぶような心持ちになった。

「悟った！ 私は悟ったぞ！」

アジャンタは僧を殴り倒すと馬乗りになり、口に粉薬をつつこんで水瓶の水をごぶごぶ飲ませた。

僧は息絶えた。アジャンタは小屋のすぐ脇の、大昔老人を埋めた所の隣に穴を掘って僧を葬ると、山を降りた。

★

龍の飛ぶ日

奥田浩二

武士の帯刀が形式的なものになった時代、貧窮している刀工が手斧の逸品に出会って熱い血を沸き立たせる、というアイディアが秀逸な作品。ごく短い作品ですが、ここには刀工の心のエネルギーが凝縮されています。細筆で緻密に描きこまれている油絵をのぞきこんで観ているような感じがします。

(水城)

「何て物を作りやがる」

月明かりに照らされて、手にした斧は風が吹き抜けた水面の様に揺れた。

洋介は、土間に転がっていた火掻き棒に向って斧を重く振り下ろした。

キンという甲高い音が鍛冶場に響き、棒は真つ二つに両断され吹き飛んだ。

当然斧には刃毀れ一つ生じていない。

恐らくは山浦、もしくははその流れを汲む刀工の作であろうか、

刃紋に流れる金の砂流しが鍛刀技術の高さを物語っていた。

これを作った刀工は一体どんな人物なのだろうかと洋

介は思った。

糊口を凌ぐため生活用品をつくる刀工は多いが、簡素な物が多く

実際使う側としてもそれで十分である。

しかしこの薪割り斧はどうだ。

正宗を虎鉄を越えようとする刀工の本能が伝わってくる。

俺はこんなもんじゃない、刀を打たせろと叫んでいるようである。

それが洋介の心をざわつかせるのである。

侍の帯刀が形式的なものとなり、刀工は食えない商売になっっている。

洋介も貧困に喘ぎ、既に一流を起こす気力は尽き、商店と結託し過去の名刀の贋作作りで糊口を凌いでいる。

飛龍刀の洋介と謳われたのは過去のこと、それでも一流には及ばなかった。

しかし刀工の本能を揺さぶられた洋介は、叫びたいほど昔に戻っていた。

★

長編の冒頭部分を惜しげもなく切りだしてみせたような作品です。ヨーロッパの、だれもが知る歴史の片隅で起こっているものごとの、それを子ども視点から見上げた秀作ですが、視点だけでなくそれを見上げる子どもの世界や身体感覚がしっかりと感じられるところが、この作品に魅力的なりアリティを与えています。

つづきを読みたくありませんか？

(水城)

銀のファステス

野々宮卯妙

家のある路地をいつものように飛び出そうとして、マルコはあやうく人にぶつかりそうになり、思い切りよく出しかけていた左足を右足の右側へ下ろして、身体を半回転させた。

自分の俊敏さに小さな快感を覚えながら通りを振り向くと、大人たちがぞろぞろと一方通行の流れを作っていた。

しばらくぼかんとそれを眺めてから、マルコは流れに飛び込んで大人たちと歩きだした。

「ねえ、どうしたの？何かあるの？」

周りの大人たちに訊ねたが、皆、一瞥するだけで相手にしてくれない。パレードかしら。サーカスが来たのかしら。でも大人たちの顔は祭りの時のように嬉しさ一様

ではなかった。

「マルコ」

頭の上を大人たちの少し興奮したような声が流れて行くなかで、自分の耳にじかに飛び込んできた声にマルコはぎよっとして振り返った。

数メートル後ろに見えたミケーレの顔は、真剣そのものだった。彼は腹の森をすり抜けてマルコの横にやってくる、マルコの腕をしっかりと掴んで、まっすぐ前を見て歩き続けた。

「どうしたんだい、何があるの」

マルコが言い終わらないうちに、テヴェレ川沿いの通りに出た。人の数が倍に増えた。

「来たな」

ミケーレが、川の向こうを見つめてつぶやいた。その視線をたどった先に、黒い服の群れがいた。

黒い服の男たちはどんどん増えてくる。大人たちは眉を寄せながら、隊列を組んで侵入してきた彼らに道を空けた。茶色い石畳を黒がどんどん覆っていく。

「黒シャツ隊だね」

マルコは目を見開いて、川の向こうをもっとよく見ようと伸びあがった。それをミケーレの手が引き下ろした。

「マルコ、君はどうする」

驚いて振り返ると、ミケーレが少し青ざめたような顔をしてマルコを見つめていた。

「なにを？」

「僕は彼らには与しない」

川岸から離れて、人の流れにさからって歩きはじめたミケーレを、マルコは川向うの黒シャツをちらつと横目で見ながら追った。

「どういうこと？」

「内閣が総辞職した。これからどうなると思う？」

「どうなるって……」

昨日は戒厳令が敷かれ、いつにない緊張感が町中を覆っていた。それが今日は一転、異様な興奮に取って代わっていた。日常とは違うその雰囲気、マルコはいつもより多い動悸で身体の中へ受け入れていた。

黒シャツの男たちからはきな臭いにおいがした。彼らの目にはぎらぎらした光があった。肌寒い空気を割って、

熱い塊が入ってきたようだった。

「マルコ、僕は彼らに抵抗する。君はどうする？」

「僕は……」

喉がぎゅつと縮んだ気がした。湧いてきた唾を呑み下すのに、少し時間がかかった。

「君と同じだ」

マルコの腕をつかんでいたミケーレの手が、ふつと緩んだ。

「よし、二人で同盟を組もう。ファシスト党に対抗する、秘密の同盟だ」

「わかった、二人の秘密だね」

ミケーレの目の奥で何か揺らいだのには気付かず、熱い塊が自分の中に分け入ってきたことにマルコは声を弾ませた。

★

なにもかも説明しようとするといろいろなもの破綻します。

倉橋彩子はなにを書き、なにを捨てるか、その取捨選択が大変たくみで、いさぎがよいほどです。

その資質はどこからやってきたものなのか。意識レベルの表面に浮かんでは消えるイメージをたくみにとらえ、ディテールを描きこみながらも、捨てるものはバツサリと捨てていく。魔女が秘薬を煮込んでいる姿が見えるのは私だけでしょか。

(水城)

キャプテンキッドの財宝

倉橋彩子

ぼこぼこぼこぼこ……

クリアグリーンの世界の中から、下の方を見ると隆起した珊瑚礁が美しく息づいている。黄色い小さな魚や、海底を歩く蟹、アオヒトデなどカラフルな動物たち。海の中はタリーが住む世界とは違う。世界は違うけど、つながっている。つながっているこの世界に、たくさん黒いもの、ドロドロしたものを垂れ流している。

「ラッキーだったね、明日から祭りがあるみたいだから明日だったら山へ登れなかったよ」

その島で行ける場所は、天見台という見晴台だけだった。山といっても珊瑚が隆起してできたこの島では、標高七四メートルの場所が一番高い場所だ。そこに旅人向

けに何かがあるわけでもない。

「祭りって、どのくらい前に決まるものなんですか？」

「おばあがいついつやるって決めたらすぐだからね、俺らもその日に船がこの島に着くまではわからないねえ。お客さんの中には、この海岸から一步も出れずに海岸で二時間過ごす人もいるよ。海岸以外は全部立ち入り禁止になるからね。よかったねえ」

フェリー乗り場のおじさんの歯は白く、肌は南の島独特の褐色だった。

船が島からどんどん離れていく、天見台を頂点とする山が遠ざかっていくにつれて頭がぼーっとしてくる。

— 女神のいる島 —

どこからともなく声が聞こえる。

ぼこぼこぼこぼこ……

海中にいるタリーは、紺碧の中をぐんぐん潜ってゆく。ほどなく、藻が絡み付きボロボロとなった帆船を見つけ、船内に入る。手に取った瞬間、糸がバラバラになつてちぎれる真珠のネックレス。何色だろうか、大きく重い十字架。次々に手に取っては放り投げる。水筒のよう

なものを見つけた。

— 皆殺しだ！ —

手に取った瞬間、耳元で大きく響いたその声に反応して、水筒がようなものが手から離れる。ゴトと静かな音をたてて床へ落ちたものを凝視するが、タリーの心はそれを見えていない。見ているのは、島民が虐殺されるシーン。目がぎよろつとしたひげ面の大男たち、小さな洞窟で怯える男女のこども。水筒ではなかった、湯たんぼだったのか、女の子が怯えた目をしながら抱えている。松明の明かりがどんどん近づいてくる。口を真一文字に結んだまま、男の子は女の子の腕を強く引っ張る。明かりは、目の前までやってきた。

体が一瞬浮いた。大きな波がうねって船が大きく揺れている。

— What are you looking for? —

低い男の声が頭の奥から聞こえる。

★

缶コーヒー

照井数男

たしかに世の中にはたくさんの方々の缶コーヒーの銘柄があり、大量に消費されているみたいですが、実際に缶コーヒーを飲んで「うまい」と思ったことはないような気がします。照井数男は日常の日陰の部分にある落とし物をうまく拾いあげるのがうまいのです。うまいと思ったことのない缶コーヒー。それを飲む男。それを書く照井数男という男。

つづけてもう一篇。占い師と女と穴とライブハウスの話。

(水城)

缶のふたを開けた瞬間立ち上がるにおいと飲み込んだときにのどを抜けていく風味に「これは違う」と思う。

こんなことは時々ある。

自販機の前を通った時に突然、頭の中に刷り込まれた缶コーヒーをおいしそうに飲む男の姿が思い浮かび、つい買ってしまふ。

そして飲んでみてがっかりする。

缶コーヒーにはこんなに多くの銘柄があるのだから、と色々試してみたが納得いく物はなかった。

もしかしたらシチュエーションの問題なのかもしれないと思ひ、暑い日にキンキンに冷えたのを一気に飲み干してみたり、寒い日に冷えた手を温めながらちよびちよびとやったりしたが結局飲み込んでみるとあーとなる。

今日だって一仕事終えて夕日を見ながら一服という状況なのだが結果はこの通りだ。

あきらめてオフィスに戻ってみると隣の机の男が共用の冷蔵庫から缶コーヒーを取り出して飲んでいた。

こいつはいつも同じやつを飲んでいる。

「それ、そんなに好きなのかい？」

「いや別に、単に家の近所のスーパーで箱で買うと安いから買ってるだけさ」

なるほど。

確かにこの男は自分の中の「缶コーヒーをおいしそうに飲む男」ではない。

いやそもそもそんな人を実際に見たことが一度でもあったらどうか。

思い出の穴

照井数男

ライブハウスに向かう途中で占い師を見かけたので、男は見てもらった。

占い師の水晶玉に、男は小さな村を見た。

「この村には大きな穴があいている。行って埋めてこい。」

と占い師に言われたので、ライブハウスには行かず、その村へ行った。

穴は見事に深かった。

穴を埋めてしまうのは惜しいと思ひ男はもつと深く掘ってみた。

すると、立派な恐竜の化石が出てきた。

化石の観察に夢中になっていると、男の近くに一人の女性がやってきた。

女性は腕に一匹のトカゲを抱えていた。

そのトカゲは弱っていたので男は世話をしてやった。

トカゲは元気になった。

女性はそのトカゲを置いて穴から出て行った。

それから、その女性は穴の中に動物を連れて度々やってくるようになった。

男はその度に動物を穴において世話をしてやることにした。

次第に穴の中の動物が増えていった。

ある日、いつものように女性がやってきた。

しかし、動物はつれていなかった。

穴の入り口には何かの動物の足跡が付いていた。

女性は、男に軽く挨拶をしてからすぐに穴から出て行ったしまった。

その後、女性は再び穴にやってくることはなかった……。

こんな歌を郊外のマンションの一室の小さなライブハウスで聴いた。

★

山田みぞれ作品を二篇。

それぞれまったく味わいの異なる作品です。が、どちらも山田みぞれの語り口です。

もちろん書き手にはどれかひとつの語り口しかないというわけではありません。無数の語り口があるのが当然なのです。我々が日常生活においてもさまざまに語り口で語っているように。しかし、小説家はどの語り口にも自分自身が乗っていないければなりません。

とても些細なできごとを微細な捉え方で書いてみせる山田みぞれは、日常のなかにスペクタクルを見つけてる生活をしているに違いありません。

バラトール

山田みぞれ

冴えた空にまあるいお月様が、河出家のお屋敷を照らしていた日の出来事です。

一世ぼっちゃまは、何やら沈思しているご様子でありました。毎夜この時分には、食後のお茶をお召し上がりになる頃であるというのに、唇をかたく閉ざしたまま、ブラウスのリボンタイをしきりにいじっているのです。

メイドの岩波妙子はというと、そんな一世ぼっちゃまには目もくれません。今日は思いがけず仕事が早く片付いた喜びで、主の背後に控えて時計をじっと見つめたまま「あと、イチジカン……」と、メイド部屋に引き返す時を待ち望んでおりました。

いつのまにやら銀ねず色の雲が蜜の月に陰をつくる
と、執事の満象はいよいよの面持ちで妙子をちらと横目

で確認し、一世ぼっちゃまにやんわりと呼びかけました。

「一世様。何か、お困りでございますか」

リボンタイは小気味よい衣擦れの音をたてながら、生き物のようにうごめいております。一世ぼっちゃまは庶民の暮らしを学ぶべく、ご幼少の頃からあやとりが得意であられます。どんな極太の紐であつても、一世ぼっちゃまの手にかければ絹糸のごとくしなやかにあやなされていくのです。

満象のくすんだ紺碧の瞳がきらりと光りを放ちます。

むすんで、ほじめて、むすんで、ほじめて一世ぼっちゃまの右手首をやはりやんわり、けれどしつかとつかみましました。

老練の執事、満象は、主の手がたいへん冷たくなっていくのを知ったのです。

満象が手を引き戻しますと、柔らかな前髪を軽くはらい、一世ぼっちゃまは目元を緩めてこう申しました。

「今夜は、満月だね」

一世ぼっちゃまはおもむろにティースプーンで、カップの中の満月をくりりとかき混ぜますと、すっかり冷め

てしまったデインブラをひといきに飲み干されました。

カップの中の月があとかたもなくなると、北風が庭園の木々をゆさぶりました。

「あと、ゴジュウサンブン……」

相変わらず妙子は、血走った目で時計の針を追いかけしております。

そんな妙子に、一世ぼっちゃまは意を決したように振り返り、こうおっしゃったのです。

「岩波。今夜は、湯たんぼをいれておくれでないかい。僕は、湯たんぼというものを一度試してみたかったのだよ。電気毛布はどうも苦手だね」

妙子はきよんととして、首を小刻みに傾げました。

「あ、あの、イチジカン、ない……」

満象は妙子に、こう囁きました。

「妙子くん、おぼっちゃまに、あたたかいココアを」

絶望に打ちひしがれたように、河出家のメイドは、よろよろとキッチンへ下がって行きます。

あとには一世ぼっちゃまの、満開の桜のような笑顔が咲き誇っております。

缶コーヒー

山田みぞれ

踏み台に足をかけたらひっくりかえった。

右手に持っていた缶コーヒーの中身が、転んだ拍子に手首を切れよく返したがために、鼻の穴を中心にして飛び散った。

おまけに左手で電燈の紐を引っ張ってしまつたらしく、畳の上で仰向けになつたトリコは闇の中にいた。

液体はあつという間に鼻の穴から流れ出て、頬からもみ上げ、耳の穴にも侵入してきた。髪の毛にも液体を感じる。

めつたに飲まない缶コーヒーなど買うんじゃないかっ
た。

それより、缶コーヒーを片手にどうしてカサの掃除をしようだなんて思つたんだろう。子どもの頃から、「な

からは、やめなさい！」といわれ続けているのにやめられない。どれもこれも、みんな一度にやつてしまいたいのだ。

トリコは、右手のその存在を確かめるように握りなおした。ゆすつてみると、まだ少しづわんと手ごたえがある。どうせなら全部私にしみこんでしまえばよかったのに、と軽く舌打ちして上半身だけ起こした。

部屋の中は目が慣れてきて、窓から町の明かりが差し込んできており暗闇ではなくなっていた。私は今どんな顔をしているのか、トリコは見てみたいような見たくないような揺らぎの中にいた。

顔や髪に絡みついた液体が乾いてきた。べつとりとした感触が、不快指数を上昇させていく。糖分ゼロと書いていなかっただろうか。この甘つたるい匂い。

これは暗がりであるから、このべつとりしたもののが血であつたとしたら、私はどんな仕打ちをされて今こうしているのだろうか。

突然、アパートの部屋のドアを打ち破りスパイが侵入してきた。いいえ、殺し屋かもしれない。2007年6

月のあの悪事を恨む輩が、ついに私の居所を突き止めて
なうての殺し屋に高額な支払いを済ませて依頼したのか
もしれない。

のうのと生きながらえているあの女を八つ裂きにし
てくれ！と。

全身に緊張が走り、首と肩が凝り固まった。

トリコはテレビの主電源ランプの赤を見つめて、残り
のコーヒーを飲み干した。

ごくりと音も立てられないほどしかない。そして、も
わりとした甘さ。

——そんなわけがない。

掃除は、明日にしよう。顔を荒い、歯を磨き、布団を
敷いて寝てしまおう。

電燈の紐をばちばちと引いた。

眩しさが目玉に刺さった。

★

テキスト表現ゼミでは、毎週、私から思いつくままに出される「お題」に沿って作品を提出してもらっている。

作品種別はなんでもよく、小説、詩、エッセイ、論文、なんでもありだ。ただし、字数制限がある。あまり長すぎると読むのが大変だからということもあるが、とにかく短いテキストのなかに世界を凝縮する練習が、テキスト表現の練習には非常に有効だからだ。

字数制限は「一文字以上五百字以内」もしくは「千字、前後一割程度」というものだ。

佐藤ほくは小説とも詩ともエッセイともつかぬ、おもしろい切り口の短文のつらなりを寄稿してくる。あえていえば、不定形短歌のようなものか。が、短歌の手触りとも違う。作者自身の手触りとしかしいような不思議なものだ。不思議だが、楽しい。もつと読みたくなる。が、短いのであつという間に終わってしまう。読むものは、読んでしまった短い文章の肌触りを、

繰り返し想像の空間のなかで反芻することになる。

以下はそれぞれのテーマに沿って提出された短いテキスト群である。不思議なテキストを味わっていただけと思う。

(水城)

佐藤ほく

よろめく

よろめく

たまらない

だまされたい

だましたくはない

よろめく

よろめいてほしいなあ

うそでも

いつでも

ふらに

やわらかそう
さわったら

指が

きもちいいだろうね

指が

よろめく

白くてふんわりとしている

ところどころにくぼみがあつて

たぶん

すこしだけあたたかい

ほうじ茶

めずらしくはない

でもひとりでは口にしない

「まだあついから気をつけてね」

ほうじ茶

えんがわや

日だまりや

きつと本当はどしゃぶりの日も

ほうじ茶

麦茶でもウーロン茶でもなく

どくだみ茶ほどではない

うすい茶いろだったような

みどりだったような

体にいいんだっけ

飲みすぎちゃいけないんだっけ

たべてみてもいいかな

またあしたもいいかな

ほしいからだ

腕がガリガリでも

むねは小さくても

別に大きくても

自分とはちがうかたち

おかあさんに似てるかな

おにく

肉感的

ももいろのおおきな
ももいろのやわらかいかたまり
やさしいものはすき

言葉だけならいいのに

手あて

銀の斧

うつぶせになってくださいあたまをむこうがわにして
苦しくはないですか

威嚇の武器
ばかり気がつけば欲しくなる

ここは

ギンノオノ

こうすると

痛みはありますか

右耳の小さな光
もつとそばで

胸の音

みてみたいとずっと思ってた

きれいですね

ぎんのおの

段ボールでかたちをつくって
アルミホイルでまきまき
キラキラひかかってきれいだね
剣でないところがしぶいね

傷ついても傷つけないで
傷つけても傷つかないで

銀の斧

叩き切ったら
傷がつくから
ピカピカのまま
使わないですむといい
あなたは

ゆたんぼ

あなたの言葉
なんどもなんども
あきるほど
とりだしては眺めてみる

ゆたんぼ

寒そうな人がいれば暖めようとする
大人になれば自然にだれもがそんな人間になれるのだ
と思っていた

湯湯婆

あなたのためだけにただそこにある
あなたはそう思っているのでしょうか

湯たんぽ

実は亀だったらびっくりするよね

缶珈琲

記憶にないのは
きつといつも
部屋の中だったから

缶コーヒー

ひとくちちょうだい。
仲良しみたいでたのしいね。

糖無

私に馴染まない
あなたの好きな味

カンコーヒー

カロヤカナコノヨルガ
オワリマセヌヨウ

偏頭痛

また痛む
また生きている

たいへんだ

あたながいたいですか
いたいのいたいのてんでけー
てんでつた？

偏頭痛中

耳がひかるとか。
なら。

痛むあなたを見逃さぬよう。

現代朗読協会 (テキスト表現) ゼミ生募集のお知らせ

従来の方法とはまったく異なったアプローチでテキストライティングの訓練をおこない、すぐれた作品を生み出すことをめざします。

◆システム

入会金 1 万円 / ゼミ費月額 1 万円 (銀行引落し)

まずは見学にどうぞ。

週に 1 回、テーマ設定にしたがって短文作品を提出、ゼミにて講評します。

月に 20 回以上開催されるゼミの何回でも出られます。

ゼミでは質問や自由な意見交換をおこなえます。ただしローカルルールにのっててください。現代朗読協会のゼミは「共感的コミュニケーション」を用いて運営されています。

毎月一回、優秀作品集の電子マガジンを発行 (無料配布)

20 回掲載されたら個人作品集刊行 (販売 / 電子出版)

※申込はこちら。

⇒ <http://www.roudoku.org>

かつて「小説工房」で一大ムーブメントを起こし、数多くの小説家、ライターを育てた水城ゆうが、ジャンルの枠を超えた「テキスト表現」の本質に迫るためのガチンコ研究会を仕切ります。

カリキュラムはありません。あつかうテキストに応じて内容は変わります。

ただしビジネス文書や商業出版など、商用目的のテキストは扱いません。

アウトプットとしては活字出版に限定せず、電子書籍、BLOG、携帯サイトなどのあたらしいメディアもターゲットとします。また、テキストから立ちあげるオーディオブック、朗読ライブ、舞台芸術や音楽までも視野にいれています。

◎こういう人におすすめです。

- ・小説家になりたい、BLOGで詩を発表してみたい、シナリオを書きたい、など、文章で自分を表現することを考えている人。
- ・これまで書きつづけてきたが、なにか壁のようなものにぶつかって思い悩んでいる人。
- ・朗読や演劇、音楽、美術などのためのオリジナル作品を書いてみたい人。
- ・その他、テキスト表現や文学に強い興味がある人。

【講師について】

カルチャーセンターの小説講座を毎回満員にし、ニフティサーブ（現・@nifty）「本と雑誌フォーラム（FBOOK）」で多数のライター、小説家を輩出した作家養成虎の穴「小説工房」を主宰した作家、水城雄（改め水城ゆう）。

（「小説工房」は、青峰社から2冊の書籍となって出版された）

ジャズピアニスト時代に執筆した処女長編が認められ、29歳で徳間書店からSF作家としてデビュー、数十冊の小説を徳間書店、中央公論社、光文社、アスキー等々の出版社で発表しながら、商業小説の世界に嫌気がさし、40代以降はネットでのみ作品を発表。

携帯公式サイト「どこでも読書」で連載した「浸透記憶」「BODY」（有料配信小説）等の作品は他の著名商業小説家らの作品をおさえてランキング連続トップ、またマルチエンディング小説ゲーム「Side-K」は初期の有料モバイルコンテンツの中でもヒットを記録。

その後、純文学的傾向を深め、掌編・詩を自ブログ等で朗読テキストとして無料公開。さまざまな朗読教室、サークル等で読まれている、いわば伝説の作家である。

次世代作家養成塾 塾長 みずき 水城 ゆう

1957年、福井県生まれ。

東京・世田谷在住。

作家、ピアニスト、演出家、コンテンツプロデューサー。

NPO法人現代朗読協会 代表。

著書 『BODY』

『原発破壊』 電子ブック

『オーディオブックの真実』 電子ブック

『音読・群読エチュード』 ラピュータ

『祈る人』 アイ文庫／電子ブック

『浸透記憶』 アイ文庫／電子ブック

『麵喰紀行』 碧天舎

『情報活用術』 ブックマン社

『ジャズの聴き方』 ブックマン社

『水城式ピアノの弾き方』 山海堂

『紺碧の少女——南洋の奪取作戦 1943』 ログアウト冒険文庫（アスキー）

『赤日の曠野』 青峰社

『小説工房 Vol.2』 青峰社

『小説工房』 青峰社

『夢巫女・美緒』 ログアウト冒険文庫（アスキー）

HiYoMeKi 第3号

2012年1月2日 第1刷発行

編著者 みずき 水城 ゆう

発行者 有限会社 アイ文庫

〒156-0042 東京都世田谷区羽根木 1-20-17

<http://ibunko.com>

表紙デザイン おおば かのん 大庭 花音